

タイトル	異文化接触としての姉妹都市交流：日本とカナダの事例から考える
著者	井上，真蔵
引用	開発論集，84：119-149
発行日	2009-09-30

異文化接触としての姉妹都市交流

——日本とカナダの事例から考える¹

井上真蔵*

はじめに

大阪の守口市とブリティッシュ・コロンビア州のニュー・ウエストミンスターとの間に姉妹都市提携がなされたのは1963年のことであり、これが日本とカナダとの姉妹都市第1号であった。かれこれ半世紀の歴史を持っている。北海道の第1号は、釧路市とバーナビーの姉妹都市であり44年になり、名寄市とリンゼイの場合も40年という歴史を持っている。このように1世代を越えて継続され、今や2世代目に入っているのである。しかし、カナダとの姉妹都市のリストにあがっている1番から10番までを取り上げてみても、2番目のバンクーバーと姉妹都市を結んでいる横浜市の活動状況は以前ほど活発ではないし、5番目のプリンス・ルパートと尾鷲市の姉妹都市関係については今や交流が途絶えた状態である²。7番目のノース・バンクーバーと姉妹関係にある千葉市も、かなり前から中学生派遣を継続するのは財政的に困難な状況のようである。従って、40年、50年にもわたり継続して活動を行くということは並大抵のことではないと言える。

日本・カナダ姉妹都市提携年次³

1. ニュー・ウエストミンスター (BC)／守口市 (大阪府)／1962.12.12
2. バンクーバー (BC)／横浜市 (神奈川県)／1965.7.1
3. バーナビー (BC)／釧路市 (北海道)／1965.9.9
4. ハミルトン (ダングラス) (ON)／加賀市 (石川県)／1968.3.21

* (いのうえ しんぞう) 開発研究所研究員, 北海学園大学人文学部教授

¹ 本稿は第18回北海道・カナダ姉妹都市会議での基調講演「事例に見る効果的な姉妹都市交流推進のヒント」をもとに加筆したものである。会議は札幌プリンスホテル国際館パミールにて2009年6月11日に開催された。

² 尾鷲市役所でのインタビュー。

³ 「カナダ・日本 姉妹・友好都市リスト」より。カナダ大使館のホームページ。

<http://www.international.gc.ca/missions/japan-japon/bilateral-relationships-bilaterales/sistercity-jumelage-jpn.asp>。カナダ大使館のホームページでは守口市の提携年次が1962年12月12日となっている。これは議会で承認された日付である。提携文書の調印日は、1963年4月10日である。

5. プリンス・ルパート (BC)／尾鷲市 (三重県)／1968.9.26
6. リンゼイ (ON)／名寄市 (北海道)／1969.8.1
7. ノース・バンクーバー (BC)／千葉市 (千葉県)／1970.1.1
8. ウィニペグ (MB)／世田谷区 (東京都)／1970.10.5
9. ジャスパー (AB)／箱根町 (神奈川県)／1972.7.4
10. リッチモンド (BC)／和歌山市 (和歌山県)／1973.3.31

このような50年に渡る姉妹都市交流の中には、「相手の行動が分かる／思いが伝わる」ケースとか、また「相手の行動が分からない／思いが伝わらない」ケースとか、実にさまざまな事例が存在している。また、中には「どう考えても不思議で、どのように解釈して良いのか分からない」といった事例も存在している。いずれの場合にせよ、われわれは自分たちの基準、物の見方、行動の仕方、を基に相手の行動を考えるとということが言える。自分たちが「当たり前」と思っていることを基準に、相手の行動を解釈しようとする訳である。これは、日本側も同じであるし、カナダ側も同じである。しかし、こんな風に頭の中では分かっている、いざ現実を目の前にすると、相手の行動や考え方を理解することは、それほど容易なことではない。日本的な思考様式や行動様式とカナダ的な思考様式と行動様式とがぶつかり合い、それが最終的には理解に至る場合もあるが、時には誤解につながる場合もある。そして、非常に稀ではあるが、最悪の場合には衝突にいたるようなケースもある。また、実質的な問題は生じないものの、相手の思考パターン・行動パターンに関しては「理解不能で謎のまま」の状態が続く場合もある。

このように、「相手の行動が分かる／思いが伝わる」ケースの場合には、その中に上手く行った条件を探ることができる。また、「相手の行動が分からない／思いが伝わらない」ケースの場合には、何が原因でそのような結果に至ったのかを考えることが必要になってくる。あるいは、相手の行動が意味不明の謎の事例の場合には、その謎を解くことができれば相手に対する理解に一步近づくとできると言える。本論では、以上のような視点から、様々なケースを取り上げて相互理解にいたるヒントを考えていきたい。

I. 「相手の行動が分かる／思いが伝わる」ケース

姉妹都市交流の場合は「友好・親善」という枠組みの中での出会いということもあり、相手と良好な関係にいたることが多い。ここでは、まず「相手の行動が分かる／思いが伝わる」ケース、つまり「うまくいっている」ケースについて見ていこう。「うまくいっている」ケースと言っても、異なる文化を持つ者同士が出会う時には、自分たちの「やり方」からすれば予想もしないような行動や考え方に会うということでもある。従って、最初は戸惑うこともあり、問題が起ることもあるが、最終的には相手が理解できるようになると言ったケースである。

1. カナダを訪れて

(1) カナダ的歓迎方式——目で見て分かる歓迎の気持ち

カナダの姉妹都市を訪れて、まず最初に接するのは「カナダ的歓迎」である。牛久市からホワイトホースを訪れた中学生の一人は次のように述べている。

ホワイトホースに着いたあの日、到着ロビーに着いたあの瞬間、僕は今も覚えている。僕を迎えにきてくれたのはホストのお父さんの Jim とその子供、双子の Baily と Tyler だった。双子は横長の大きな紙を持っていて、そこには「WELCOME TO WHITEHORSE KOJI」と大きく書かれていた。それを見た僕は、うれしくて涙をこらえるのが精一杯で Baily や Tyler が話しかけてくるのに「Thank you」や「I'm glad」としか言えなかった⁴。

同じように、世田谷区からウィニペグに着いた男子中学生の一人も次のように語っている。

“Hey Lui!”これが僕と初めて出会った時のギャレットの言葉でした。彼はカナダ国旗と日本国旗をバックに“Welcome Lui!”と画用紙に大きく書いて、高く揚げ、ウィニペグ空港の到着口の前でスウォー家のみなどと待っていてくれました。僕はギャレットと家族を見た瞬間、なぜか晴れ晴れとした気持ちになり、今まで持っていた漠然とした大きな不安が吹き飛んでしまいました⁵。

まさに歓迎の気持ちがストレートに伝わってくるが、これは何も中学生を迎える場合だけではない。陸別町からラコムを訪れた研修団の人たちも、現地の農場を視察した時にカナダ的歓迎を受けるのである。日本的基準からすれば、とてもは考えつかないものであり、訪れた人たちは驚くことになるのである。

F. プリンズポテト農場に到着するや、あっと驚く。カナダの国旗のとなりに日本の国旗がはためいていたからだ。後で話を聞いたところ、奥さんのイレーネさんがわざわざ朝早くから白い布地に赤い日の丸を縫いつけて作ってくれたという。本当に頭が下がる。プリンズ家はオランダからの移民者で、1936年現在の主人であるフランクさんのお父さんがこの地に入植して1945年から馬鈴薯を作り出したという。そして26年前から種子馬鈴薯を手がけ、ボランティアで通訳のお手伝いに来てくれている弘中さんをはじめ6戸がこの傘下に

⁴ 『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』牛久市姉妹都市委員会、1998年（以後『1998年度報告書』と略す）、15ページ。

⁵ 世田谷区役所生活文化部文化・国際課『第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書』2004年3月（以後『ウィニペグ市派遣報告書』と略す）、50ページ。



こんな風に大きな日の丸を空高く掲げて歓迎されれば、感激しない日本人はいないだろう。

ある⁶。

大きな紙に「WELCOME TO WHITEHORSE KOJI」と書いたり、カナダの国旗と日本の国旗を持って「Welcome Lui!」と書いて歓迎するのは、日本的感覚からすれば思いつかない。仮に思いついたとしても、周りの目が気になって、とてもできないかも知れな。まさに日本からの中学生にとっては予想もしないことであり、「涙がでてくる」歓迎の仕方であるし、「不安を吹き飛ばす」歓迎方式なのである。

さらにプリンズポテト農場での「日の丸」を掲げての歓迎も、日本からの訪問団の人たちには予期せぬことであった。わざわざ朝早くから「日の丸」の旗を自らの手で作ってくれたのである。その気持ちと行為にたいして、まさに「頭が下がる思い」というのが訪問団の人たちの気持ちであった。やはり日本の基準で考えると、このように相手の国の国旗を掲げて歓迎するという事は、(公館庁は別として普通の家では)あまり頭に浮かばないのではないだろうか。仮に浮かんだとしても、写真に見られるような大きな国旗を自分で作ろうとする人は居ないのではないだろうか⁷。

以上のように、いずれのケースにしる、カナダ人の歓迎の気持ちが、目で見て即分かるように表現されているのである。そこには周囲の目を気にするような気配は微塵もない。自らの歓迎の気持ちを、「日本人が考えないような方法」で、素直に表現しているのである。紛れもなく

⁶ 『絆 8000 キロを越えて——昭和 61 年度町民海外研修報告書，陸別町・ラコム町姉妹都市提携の概要』陸別町役場，1986 年（以後『絆 8000 キロを越えて』と略す），24 ページ。プリンズポテト農場の写真も，報告書の同ページに掲載されたものである。

⁷ 写真は『絆 8000 キロを越えて』の 24 ページより。

「歓迎の気持ち」が伝わってくるし、これが相互理解の第一歩とも言える。

(2) 相手を理解しようとする態度

中学生も高校生も、英語しか使えないホームステイの環境の中で、最初は何も言えず相手の言っていることも分からず、まさに不安がいっぱいの環境の中に置かれるのである。そんな中で、今まで一度も経験したことのないような「真剣な相手の態度」に出会うことになる。日本では経験したことのない状況を、それぞれ異口同音に次のように語っている。

皆、自分のつたない英語を分かるまで真剣に聞いてくれた。私ができるまでゆっくり、そして分かりやすい言葉ではなしてくれられた。とてもうれしかった。しかしもっと勉強してくれば良かったと思った⁸。

ホストファーザーは、私分からないときは辞書を引いて日本語を話してくれたのでうれしかった⁹。

フランチャック家のみんなの話し方がとても優しくかったのだ。ゆっくり話そうとしてくれたしそれに何よりも英和辞典を持っていてくれたことが嬉しかった。もしかしたら、それを持っているのは当たり前かもしれないが、ソーニャの辞書を引き、私に語りかける声は、私を微笑ませた¹⁰。

これらのケースに共通の点は、日本の姉妹都市から来た生徒たちを「理解しようとする真剣な態度」である。「つたない英語を分かるまで真剣に聞いてくれた」のであり、「分かるまでゆっくり、そして分かりやすい言葉ではなしてくれられた」のである。また生徒たちが分からない時には、カナダ人のホストの方が「辞書を引いて日本語を話してくれた」り、「英和辞典」を用意してくれただけである。もうこれだけで、「理解しよう」という真剣な意図が十分に伝わってくる。「一を聞いて十を知る」文化の中で育ってきた若者たちにとっては、このように真剣に理解しようとする人たちと関わりあうのは多分日本語でもなかったことであるし、ましてや英語では経験したことがない事であろう。そして、生徒たちもまさに必死になって応えて、伝えよう、分かろうとしているのである。

⁸ 『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』牛久市姉妹都市委員会、2001年（以後『2001年度牛久市報告書』と略す）、13ページ。

⁹ 同上、10ページ。

¹⁰ 『ウィニペグ市派遣報告書』、35ページ。

(3) シャワーは直せるよ！

これまで見てきたように、カナダ人の方から日本の基準では考えられないような形で意思表示をしてくるといふ場合が多い。しかし、日本人の方から積極的に働きかけていくという例は少ないながらも、全くないという訳ではない。オンタリオ州のある町でホームステイをした人のエピソードを次に示そう。

ホームステイをした時のことですが、どこの家にも地下室があるでしょう。そこに道具があって、自分で間に合うのは、自分でやっていますね。たまたま、シャワーが駄目だったので、直してやりましたよ。開けてみたら、パッキンが全然入っていなかったという訳でしたね。電気にしろ機械にしろ、向こうからきているのが多いから、英語らしく発音したら、大体通じますよ。カタコトでも通じますから¹¹。

ホストのカナダ人にとっては、客人を迎えて故障したシャワーというのは問題である。日本であれば、お客が来る前に水道屋さんを呼んで直してもらっていることだろう。ところが、カナダでは日本のように水道屋さんには直してもらうのではなく、自分でやろうとする事が多い。従って、シャワーから満足にお湯がでないとか、下水が上手く流れない、ということもしばしばである。

さて、このような所にホームステイをした場合は、多分、満足にシャワーも浴びることができずに帰ってくるというのが一般的ではないだろうか。ところが、このケースの場合には、それとは正反対である。もちろん何もせずに放っておくということもあり得たのであるが、この人の場合には「シャワーを直しますよ」という明確な意思を示し、実際に修理することにより目に見える形で問題の解決をもたらしたのである。このような行動を取れる日本人は多くはないが、この人の場合には「電気にしろ機械にしろ、向こうからきているのが多いから、英語らしく発音したら、大体通じますよ。カタコトでも通じますから。」と言っているように、基本的な姿勢が極めて積極的であり、人に働きかけていこうとするのが特徴的である。工具を持って、カタコトでも気にせず「英語らしく発音」して、ホストのカナダ人に話しかけていく姿が目映るようだ。具体的な行動と言葉でもって相手に働きかけていく態度は、カナダ人にとっては非常に理解しやすいタイプである。日本人がこのように積極的なコミュニケーションがとれるようになれば、間違いなく相互理解が深まることであろう。極めて珍しいケースではあるが、一つのモデルとなると言っても良いだろう。

(4) 目的は、カナディアン・ハウスだ！——言葉で反論

以上見てきたのは、最初から相手の意図や行動が理解できたケースであるが、そのようにス

¹¹ 名寄市役所でのインタビュー。

ンナリとは行かない場合もある。次のケースは、親善訪問でアルバータ州のある町を訪れた時のことである。

ホームステイの最初の日に、応接間でコーヒーを飲ませてもらっていたら、ホストのジムという人が言ったんですね。「お前たちの旅行スケジュールをオレは知っているんだ。オレたちが、こういう日程で行くんだったら、これぐらいするんだ。」「なんだこの人は」という感じで、僕はカッときたんですけどね。それで、町がなんぼ負担してくれて自分たちはいくら負担だということを説明したんです。そしたら、「お前たちのスケジュールは知っているんだ。帰りにハワイに行くんだろ。ハワイは良いところだ。パラダイスだ。オレたちも冬になったら遊びに行くところなんだ。だからお前たちは公の金を使って旅行にきているんだろう。ほんとうの目的はハワイなんだろ。オレたちの所へ泊りに来たのは口実であって、公費をもらうための目的はハワイなんだろ」で、すごく「こ馬鹿」にしたような感じで言われたんですよ。それで僕は英語は得意じゃなかったけど、もう頭にきて、「オレの目的はカナダのログハウスとか2 x 4のカナディアン・ハウスを見たいんだ。家を建てる計画をしているんだ。世界一のカナディアン・ハウスを見たいから来たんだ」と言ったんです。そしたら、翌日からアッチコッチ連れて行ってきてね。それで、すっかり喜んでくれたんです¹²。

いくらカナダ人でも、初対面の場でこんな風にダイレクトに言う人は珍しい。日本人の常識からはとても考えられない行動であり、このような場合、大方の日本人は、ただ黙ってしまい、悔しい思いを胸に秘めて帰国することになるのではないだろうか。ところが、このケースの場合には、実に相互理解が生まれたのである。

このエピソードから言えることは、カナダ人も「カナダ人の視点」から見ているということである。一般的に、カナダから日本に来る場合は自己負担であるが、日本側から行く場合は自治体から程度の差はあれ何らかの補助がでることが多い。このような事情を知っていれば、「カナダ人にとってハワイはパラダイス」であるし、訪問団のスケジュールには帰りにハワイに立ち寄ることになっているので、全くの「誤解」ではあるが、上のような発言になるのも分からないことではない。

このケースで重要な点は、この日本人の方が「英語は得意ではない」にも関わらず、「その場で、カナディアン・ハウスを見たいんだ」と理由を述べて反論したということである。普通であれば、多分、悔しくても何も言えずに、黙ったままであったのではないだろうか。ところが、それではお互いに誤解を抱いたまま別れたことであろう。こちらの思いを言葉にする事により、「こちらの意図」が相手に伝わっているのである。これがなければ、次の日からあっちこっち

¹² 鹿追町役場でのインタビュー。

に車ででかけてカナディアン・ハウスを見て回るといったことも起こらなかったことだろう。そして、話はこれで終わってはいない。その後、日本に帰ってから手紙のやり取りが続いているし、息子さんもカナダのその町に留学したとのことである。誤解から起こった問題を放置するのではなく、「こちらの意図を正確に伝える」ことにより、普通ではあり得ないような深い相互関係が生まれたケースであると言えよう。

2. カナダ人を受け入れて

(1) 嫌いな物／好きな物

日本人の場合は、多少口に合わなくても相手に悪いと思い、我慢して食べてしまうことが多い。しかし、カナダ人の場合は好き嫌いがハッキリとしており、特に青少年の場合にはそれが顕著である。具体例を二、三、見てみよう。まず、日本人ならお馴染みの幕の内弁当をだすと、次のような具合であった。

お弁当をみんなに配ったんです。その瞬間に、ガッカリした顔をしましたねー。基本的に、日本に来たから和食って思いますけど、食べないですね、子供は。一人だけ、何でもパクパク食う子はいたんですけど…。他の子は、やっぱり和食系は、ちょっと手をつけるだけで、あまり食べませんからね¹³。

これとは対照的に、「やっぱり、マクドナルドが一番。マクドナルドに連れて行くと、もう大喜びで。」と言うように態度も一変するように、好きな物に対しても態度が明確である¹⁴。

時には、カナダ人の方から日本食を食べたいというリクエストがされることもあるが、チャレンジしてみようという気持ちはあっても、次のように必ずしも上手くいくわけではない。

ある家庭では、普段パンが多いらしいんですね。でも、その女の子だったんですけども、私は日本でしか食べれない物を食べてみたい。ご飯に味噌汁に焼き魚。そういう朝食をリクエストしたんです。やはり、魚はあんまり好きではなかったようですけど。やはり、味噌汁って、出汁の風味がどうしてもダメだったと言ってましたね。興味を持ってチャレンジした子もいるようですが、やはり普通に出すと、どの子もダメだったようです。食事に関しても、かなり色々苦労されているようですね¹⁵。

こんな風に、嫌いな物は食べないし、好きな物は食べるといったように、態度は非常に明確

¹³ 牛久市役所でのインタビュー。

¹⁴ 同上。

¹⁵ 世田谷役所でのインタビュー（第1回）。

である。しかし、毎日食事を用意するホストファミリーのお母さんたちにとっては、難しい問題なのである。「なかなか食べないし、ともかく何を食べさせて良いのかが分からない。本人の好物を聞いても分からない。」という状況である¹⁶。このような中、あるホストが試してみたのが、次のような方法である。

今回、あるお母さんが、これをもっと早くやっつけば良かったと仰ったのは、居酒屋なんですね。近頃、居酒屋でも家族で行く所が多いですよ。そこに行って、少しずつ取って、ジャー好きな物を食べてみなさいと言って、それである程度好みを把握したと言うご家族がいらっしやいました¹⁷。

「もっと早くやっつけば良かった」という言葉が示すように、居酒屋で難問題が解決されたのである。「少しずつ取って、ジャー好きな物を食べてみなさい」というホストの言葉は、カナダ人の中学生にハッキリと伝わっている。居酒屋のような場所で食べるのは、カナダ人にとっては「それ自体」で興味津々の体験であるし、「少しずつ選べる」というのが何と言ってもポイントである。居酒屋という場所と料理を媒介にして、相互理解が深まる様子が目に見えるようである。

(2) 「ボクの部屋」に入らないで！

表現も行動も、カナダ人の場合は日本人とは異なりダイレクトであり、日本的基準からすれば驚かされることが多い。ホームステイをして他人の家に泊めてもらうことに関しても、随分と解釈の仕方が異なっている。道北の町で、カナダ人の学生を泊めた市長さんは、次のように語っている。

向こうの学生はイエス・ノーをとにかくはっきりと言いますネ。息子の部屋を一室与えて自由に使うように言ったんです。布団に寝るのなら、どんな風に使っているのかなと興味があったので、部屋を覗いてみる。スーツケースは開けて、お土産、バッジなどを並べてある。何もした訳ではないが、帰ってきて「誰か、ボクの部屋に入ったのではないか？許可なく入らないでくれ」と、言う事はハッキリと言う。日本人であれば、入ったなと思っても、泊まらせてもらっているのだからと思って何も言わないでしょう。われわれの方も変わらざるをえないということでしょうね¹⁸。

このようなカナダ人の言葉は、日本人としては考えられないことであり、啞然として何も言

¹⁶ 同上。

¹⁷ 同上。

¹⁸ 名寄市役所でのインタビュー、前掲。

えないのが普通であろう。日本人の感覚としては、ここにもあるように「泊めてもらっている」、
「部屋を使わせてもらっている」というように、いわば遠慮という気持ちがあるので、「ボクの
部屋」と言うような捉え方をすることはあり得ないことなのである。

ところが、相手はカナダ人。日本人が「なぜ、そのようにするのか」が分からず、あくまで
もカナダ人の基準で行動するのである。たとえホームステイの期間中、部屋を貸してもらって
いても、それは一時的にせよ「個人の空間」と理解されるのである。従って、そのような視点
からすれば当然のことながら、「許可」が必要となるのである。

このケースの場合には、ホストの側は以上のような違いを明確に意識しているかどうかは不
明ではあるが、「われわれの方も変わらざるをえない」という認識に至っており、少なくとも相
手のカナダ人の行動を理解するようになってきていると言えよう。ところが、同じような状況の下
でも、別の所で触れるように、相手の意図が理解できないというケースもあり得るのである。

3. 担当職員として

日本の自治体には、日本の自治体の仕事のやり方があり、ほとんどの部署ではそれで業務が
問題なく行われている。ところが、姉妹都市交流の場合は、相手は日本人ではないので、その
ようなやり方では問題が生じる場合もある。そして、そのような状況に面して「自分たちのや
り方以外にも異なるやり方がある」ということを理解するのである。それはカナダ側について
も同様である。

(1) 子供たちと交流をしに来たんだ！——形式重視から内容重視へ

今まで慣れ親しんで来たやり方が、カナダ人を迎えることにより、異なる考え方に接して、
変化をすることがある。ある担当職員の方は、次のように述べている。

最初にポートアルバーニーより子供が来た時のことです。学校制度の仕組みに違いがあり、
網走の夏休み中に来て下さいと言ったんです。ところが、向こうの都合により、休みが終
わってから来たんです。ちょうど向こうに帰って学校が始まるという時に来たんです。向
こうの団長さんが校長先生だったんですが、学校の授業見るのはいいと言うんですね。一
番不満だったのは、ウチの子供が来ているんだから、網走の子供も授業を欠席にして、集
まってキャンプなり何なりして、そういう交流行事を大いに期待していたらしいんです。
ところが、そういう事は全くなくて、スケジュールは分刻みですね。あっち、こっちと。
それで、「われわれは観光に来たのではないんだ。交流するために来たんだ。」と。

だいぶ前にですね、来た時には、こういう対応をしますというスケジュールは送ってあっ
たんですね。それで、僕たちは理解されているものと思ってたんです。しかし、あの時は
トラブルと言うか、校長先生が乗り込んできましてね。急遽、仕方なく教育委員会を通し
て学校長の協力をいただきまして、向こうに行って交流したことのある子供たちに、特別

に対応してもらったんです。

形式的な行き来だけではなく、来ればその機会を使って公式的な行事をへらしてまでも話す機会、遊ぶ機会、それが結果として友好なり親善になると思う。交流を深めるというのは、人と人との出会いですよね。出会いの機会が多ければ多いほど、お互いに理解しあえる。そうして友好とか親善、それが生まれてくるのではないかなと。それをなくして単なる行事だけの交流であつたら、友好にも発展していかないんじゃないかと、僕はそう感じてますけど¹⁹。

日本的基準からすれば、まずスケジュールに空白を作らずに埋めてしまうのが第一の課題であり、日本人相手であればそれで問題はないのである。ところが、団長の校長先生が乗り込んできて、「われわれは子供たちが交流するために来たんだ」と、自分たちの目的を明確に伝えたのである。もちろん、このように「目に見える形」での抗議があつたからこそ、例外的な措置を講じることが可能になったという側面もある。

そして、このケースから言えることは、カナダ人の校長が自ら訪問団の引率者となり、子供たちの交流が目的で観光が目的ではないと、抗議をしているということである。そのようにして、意思疎通が行われたのであるが、同じような状況であっても日本人であれば多分何も言わなかったのではないだろうか。従って、問題があつても「問題」とは認識されずに、単にスケジュールをこなしていただいただけかも知れない。いきなりカナダ人のようにはいかないにしろ、目に見える形での意思表示が非常に重要であることは明らかである。

(2) カナダ側の学ぶ姿勢

日本の自治体の職員にとって、カナダ側のスケジュールは「アバウトだ」と受け取られることが多い。一般的に言えば、そういう事が言えるかも知れない。しかし、時には日本に学ぼうという姿勢が見られる場合もある。カナダのある町での歓迎パーティの席上で、カナダ側の感想が次のように述べられている。

「みな精力的で、ハードスケジュールをこなすのに驚いた」、「礼儀正しく、親切で」——とたたえ、「地域の身の回りしか関心がなかったが、私たちの知らなかったことが多く、もっと視野を広げるよう日本でぜひ学んできたい」という人など、来年の陸別行きの参加希望者が相次いだ。「習慣など、もっと話し合いたかった」という対話時間不足については、町職員が「日本人はエネルギーがあるので盛りだくさんのスケジュールを組め、とバット町長から言われたので」と正直に話してくれた²⁰。

¹⁹ 網走市役所でのインタビュー。

²⁰ 「辞書を片手に話弾むーホームステイ」、『北海道新聞』、1986年7月19日。『絆8000キロを越えて』

このバット町長は何度も日本の姉妹都市を訪れており、非常に交流に熱心な方である。そのような体験から、日本的やり方を見習おうとする姿勢が伺える。普通であれば、カナダ側の作成するスケジュールは、日本のように分刻みのスケジュールとは異なり、自由時間が多く、非常にフレキシブルである。そして、担当職員が「盛りだくさんのスケジュールを組め、とバット町長から言われたので」と語っているが、カナダ人にしてみれば「普段のやり方を変える」ということであり、結構気を使うことであろう。それにしても、ここでは町長が日本人の行動をよく理解し、日本人を迎える際の町長の意図が明確に現されている。

II. 「相手の行動が分からない／思いが伝わらない」ケース

ここでは、カナダを訪れた時や、あるいは日本でカナダ人を受け入れた時に、お互いの意図や行動の意味が相手に上手く伝わらなかったり、伝えることができなかった場合について見ていくことにしよう。

1. カナダを訪れて

(1) シャワーが使えない

東京都内のある小学校は、ブリティッシュ・コロンビア州のサレー市の小学校と相互訪問をしている。サレーでホームステイをした時の模様を、引率の教員が次のように語っている。

周りには外国生活の経験者も居ますので、英語指導だけではなくて、トイレのドアとか文化面での指導もやって行きました。今回もシャワーのノブの使い方が分からないというのがありましたね。日本とは方式が違っていて、引っ張るというタイプなんです。これが、分からなくて、ホームステイのマザーに言えなくてですね、お風呂に入れなかったということがありましたね。日本の子は、言えないんですね²¹。

「シャワーの使い方が分からない」という問題を前にして、その事を相手に伝えようとはしていないので、カナダのホストにとっては「日本の小学生が困っていること」は分かりはしない。「お湯がでない」の一言が言えない。言葉が出てこなければ、ホストをシャワーの所まで連れて来てジェスチャーで示すこともできたはずである。そうすれば、多分、問題は解決していた

前掲、24 ページ。

²¹ 第三大島小学校でのインタビュー。第三大島小学校では、小学生同士が5日間のホームステイをしている。カナダの小学生を迎えて、第三大島小学校の先生方は、「カナダの小学生は社会化しています」と述べているように、大人を相手に堂々と話をするのができるのには驚いている。しかし、このように誰に対しても自己の考えを述べるのができるカナダの子供たちも、「汲取トイレを使わなかったり、日本のお風呂には入らなかったりしている」と報告されている。

ことであろう。言葉でも行動でも「何も伝えようとしなかった」ので、ホストにしてみれば「何も問題は無い」という解釈しかできないのである。

(2) これでお風呂に入れだって!?

シャワーのノブの使い方が分からなくてお風呂に入れなかった小学生のケースを見たが、大人の場合にもお風呂に入れなかったケースがある。もっとも、その理由は次に述べるように多少異なっている。

僕もホームステイをやった時、「お客さんたちは、ここでお風呂に入ってくださいよ」って言われたんですよね。いざ風呂に入ろうと思って、われわれの感覚では水を出せば水が出るし、お湯を出せばお湯も出るんだと思って入った訳ですね。ところが、お湯が出ないですよ。チョロチョロとしか出ないんですよ。こんな風呂に一体どうして入れと言うのになって。それで、最後までお風呂に入らないで帰ってきてしまいましたよ²²。

このケースから言えることは、日本で客人を迎える場合のことが基準となって判断されているということである。客人に対して「お湯がチョロチョロしかでない風呂に」入ってくださいなどは、日本では考えられないことである。日本的基準からすれば、「こんな風呂に一体どうして入れと言うのか」という疑問しか浮かんでこない。そして「相手に迷惑をかけない」というように思って、入らずに帰ってきたのである。

この場合も、「お湯がでない」という問題があるにも関わらず、その事が言葉でも行動でも一切ホストには伝えられていない。従って、カナダ人のホストからしてみれば、この場合も問題は全く存在しないということになるのである。問題を自分の中に仕舞い込むのではなく、まず「お湯がでない」ということを伝える、それができなければ、ホストを連れてきてジェスチャーでも問題を示せば、新たな関係が生まれていたかも知れない。

(3) タバコが吸える雰囲気じゃない

上の場合は、ホームステイ先でお風呂に入らなかったケースであるが、ここで取り上げるの

²² 鹿追町役場でのインタビュー、前掲。このような場合、「どうして、こんな風呂に入れと言うんだ」との思い、つまり日本的常識では考えられない状況なので、「お湯が出ないんだけど、どうして出ないんだ」との言葉が浮かんでこないのかも知れない。「それを聞かないで、最後までお風呂に入らないで帰ってきてしまう。そういうのが日本人の感覚だと。相手に迷惑かけないとか、そういう感覚があるために聞かずに済ませてしまうのが日本人の感覚なんだね。」という言葉もインタビューで聞かれた。

カナダでは、水道の修理などは自分でする人が珍しくはない。従って、このような事自体、日本のように水やお湯が完璧に出るのが常識の文化から見ると、理解するのにかなりの時間がかかると思われる。

は「タバコを吸うのを我慢」したケースである。なぜタバコを吸わなかったのかは、次のように述べられている。

タバコを僕飲むもんですから。その家庭で3泊したんですが、その家庭では1回もタバコは飲まなかったですね。何となくタバコを飲む雰囲気ではなかったんですね。朝、車で集合場所に送ってもらって、交流委員会の委員長さんだとかに案内してもらって、一日視察とかして、帰りに送ってもらったんですね。二日目にタバコを飲むと聞いたことを知ったんでしょうかね。葉巻をもらいましてね。その家で飲みましたが、飲んだのはその時だけでしたね²³。

このケースから言えることは、三日間泊まったホームステイ先ではタバコを飲まずに我慢していたということである。その理由は、「吸うような雰囲気ではない」と判断したからである。「タバコを吸ってもいいですか？」と尋ねた訳でもないし、ホストの方から「タバコは吸わないで」と言われた訳でもない。従って、ホストにしてみれば、ステイしている日本人が三日間タバコを吸わずにガマンをしていたということは、知る術もない。「どうして言ってくれなかったの？」と言うかも知れない。しかし、日本人の方とすれば、「そこまで、相手を煩わせてまでは…」との思いであったのに違いないが、この思いもホストのカナダ人には全然伝わってはいないのである。

日本で食後に、「タバコを吸っても良いですか？」と尋ねると、吸ってもらいたくないと思っ
ていても、「いいえ、遠慮してください」などと否定的な答え返すのは難しいのではないだろうか。ところが、カナダでは「自分の気持ちを相手に伝える」訳であるから、必ずO.K.という答えが返ってくる訳ではない。「吸わないでください」との返事が返ってくることもあるし、「ベランダで吸ってください」と言われるかも知れない。いずれにせよ、日本では空気を読むことが必要のように、カナダでは尋ねてみるのが大事なことだと言える。

2. カナダ人を受け入れて

(1) 嫌いな物はお皿に残る

食事に関しては既に触れたように居酒屋で解決したようなケースもあるが、味覚に関する問題だけに、なかなか問題解決が難しいようである。日本人であれば、「相手に失礼」と思い、たとえ自分の口に合わなくても食べようと努力をするものだが、カナダ人の場合には次に見るように事情は異なっている。

一応、ホストには、「いつもと同じ食事を出してください」って説明をしているのですよ

²³ 網走市でのインタビュー。

ねー。折角日本に来ているのに、それも、やっぱり経験ですからねー。ホストの人も、折角、日本に来たんだから、どうしても日本食って考えちゃうんですね。でも、大人の人だとね、あんまり美味しくないと思いつつもそれなりに対応できるけど、特に子供の場合は、それこそ、要らない物は要らないって感じですよ。遠慮がないっていうのか…まあ正直というか。顔にすぐ出るし²⁴。

この間、アルバータから32名が来た時、次の日に打ち合わせに来てもらったんですよ。ウチの家内に昼メシ用意してくれて言ったら、ウチのカミさん、即席にオニギリを作って、それに味付け海苔巻いて出したら、来た人たちは「イヤー、悪いニオイだ」って外して食べてましたよ。ダメだ、ニオイ悪いって。No, thank you. ね。そしたら、ウチのカミさん、あっけにとられちゃってね²⁵。

これら以外にも、「普段のままでいいから」と考えて、梅干しや納豆や豆腐などの日本食を出したが食べなかったとか²⁶、あるいは通訳の人から「日本式で良いですから」と言われて、幕の内を出したところ、ほとんど手をつけなかったというケースもある²⁷。このように、日本的基準では考えられないことであるが、大人も子供も好き嫌いをハッキリと態度に出すということである。メッセージは明らかである。

これらのケースに見られるのは、「折角日本に来たのだから」、「普段のままでいいから」、「日本式で良いですから」と言った発想である。このような考え方で支障なく事が運べば良いのだが、お皿に残された食べ物を見れば、お互いに楽しい思いになれる訳はなく、問題があることは明らかである。

相手が「食べられない」というメッセージを出している以上、日本的基準に固執していても問題の解決にはならない。別の箇所で、「居酒屋方式」で好みを見つけ出したというケースについて触れたように、創意工夫が必要とされる。一般論ではあるが、幕の内とか「一人前」で出される形式よりも、大皿で用意して「好みに応じて」取り分けることができる方式にすることにより、「手もつけずに」料理が残るとうリスクが軽減されるものと思われる。

(2) ボクの部屋に忍び込んだのは誰!?

文化が異なると様々な点で違いが現れてくるが、まさか自宅の部屋を貸してあげているカナダの中学生から、「ボクの部屋に忍び込んだのは誰」と言われるなどとは、誰も夢にも思わないだろう。状況を簡単に説明すれば、東京近郊の町で、真夏にカナダの北の果ての町から中学生

²⁴ 牛久市役所でのインタビュー、前掲。

²⁵ 鹿追長役場でのインタビュー、前掲。

²⁶ 池田町役場でのインタビュー。

²⁷ 白老町役場でのインタビュー。

がやってきた時のことである。真夏の事で、クーラーはつけて寝るのが日本の常識。そして、翌朝起こったのは、次のような事態であった。

12, 3, 4 ぐらいの子供だったんですね。後で団長さんから聞いた話なんですが、あまり家庭的にうまくいっていない子だったようで…。感情的にデリケートな子が居て、夜、寝る時は暑いんで、クーラーかけたままで寝かすんですね。それで、ホストの人が、クーラーかけたままでは、アレだろうからと言うんで、寝た後に止めてやろうと思って入っていったら、忍び込まれたみたいな形に取られて、精神的にパニックになったみたいな事がありましたね。

その子は、それ以外でも、ちょっと色々あったようなので、もともと何か神経質な子だったようで、余計そうなっちゃったのかも知れないですね。その年は、団長さん、引率の大人の方は4名来ていたんですけど、もう、そちらに電話がよくあって、団長がもうちょっとだからガンバリなさいと宥めていたようなんですけど²⁸。

このような文脈で、「ボクの部屋に忍び込んだのは誰!?!」とか言われても、日本的基準からすると、「随分と失礼な話」であるし、その意味が理解できないのが普通である。「何で、こんな事を言われなければならないのだ」と憤慨する人も居るかも知れない。しかし何とか理解しようとするれば、上にも触れられているように「感情的にデリケート」で、「家庭的にうまくいっていない子」だと、言わば「例外的」だと考えることにより「理解」する以外に方法はないのである。

しかし、この場合のメッセージは、「許可なくボクの部屋に入らないでくれ」と言うことで、極めて明快である。ところが、日本的基準であれば、「部屋を貸してあげて」いるのであり、クーラーをかけっぱなしにしていると「体に悪い」ので、目を覚まさせないように「ソウッと入って」クーラーを止めたのである。まさに日本人の常識にのっとっての行動であり何ら問題はない。

ところが、相手はカナダ人。日本人が「なぜ、そのようにするのか」という日本的な「心遣い」など分かる訳はない。カナダ人の基準で行動するしかないのである。たとえホームステイの期間中部屋を貸してもらっていても、それは一時的にせよ「個人の空間」と考えられるのである。従って、既に別の箇所でも触れたように、「許可」が必要となる。全く異なる視点から見ている訳で、「相手の視点」が分かれば論理的であり分かりやすいと言える。

このように、お互いに全く相手の行動様式が分からないまま出会い、別れるという場合もあるのである。お互いの文化の仕組みが分かれば、少なくとも相手に対する不信感を抱いたまま別れるということは防げるだろう。

²⁸ 牛久市役所でのインタビュー、前掲。

(3) 掃除をガマン

日本人が相手なら、お互いに気を使いあうので、他人の家に泊まったとしても大した問題はおこらないだろう。つまり、泊めてもらっているという気兼ねがあるので、自分の家では片付けなくても、他所様のお宅では布団もたたみ掃除もすることになるだろう。ところが、カナダ人の中学生を泊めた場合には、かなり違った状況に直面することになる。ある担当職員の方が、次のようなエピソードを紹介してくれた。

部屋を掃除したいけど、ガマンしていたって話があるんです。中学生の男の子を受け入れた家庭なんです。専用の部屋を用意して、クロゼットもここだよとか話してあるんですね。ところが綺麗好きの子ではなかったようなんです。シャワーもほとんど浴びないし、脱ぎ散らかして、そのまま置いておく。それが、ちょっと話をしに部屋に入った時なんか、目につくんですね。自分の子供でしたら、それこそ怒鳴りつけるとか、洗濯しちゃうとか、どうにかするんでしょうけど。やりたいんだけど、ガマンしていたって言っていました²⁹。

このように物事が終わった後で、日本人同士が苦情を言い合うのはよくある光景であり理解できることである。しかし、これでは問題は解決されない。ホストマザーは、「掃除をしたい」とは一言も言っていないし、掃除機を持って行って行動で示すというような事もしていない。従って、「掃除をしたい」という意図は、全然カナダ人の生徒には伝わっていないのである。そして、ホストマザーの方から何も意思表示がないので、カナダ人の生徒にしてみれば、「問題の存在」すら感じていないのである。

「掃除をしたい」という問題を解決するには、意思表示が不可欠である。担当職員の方は、「ほんとに言葉が出来る人ばかりじゃないんですから。娘さんが居て、ヤーツという英語がしゃべれる家庭がほとんどなんです。」と語っているように、「英語でしゃべらないといけない」という考えに囚われていたのかも知れない。日本語で「掃除をしたいから」と言ってもよいし、掃除機を持ってきて、「あなたが掃除して」と日本語で言っても、十分に気持ちは伝わると思われる。日本語でも良いから「掃除をしたい」という一言、この一言を口にするのはほんとうに難しいことかも知れないが、これによって状況は異なってくることであろう。その時に掃除をしないかも知れないが、翌日に掃除をすることになるかも知れない。こちらの意図は伝えた以上、「掃除をガマン」という心理的なモヤモヤで悩むことはないし、相手もこちらの意図は理解できているので、後は相手の反応次第なのである。

(4) 俺たちは友達を訪ねてきたんだ!

日本人の基準からすれば、カナダ人の行動は理解できない所も少なくない。同様の事は、カ

²⁹ 同上。

ナダ人の基準からも言える訳であり、それは次のような表現からも窺うことができる。

腹割って言ってくれたわー。ツカレターって。オレたちは友だちのところへ遊びに来たんだ。だから礼服というか、そういうものは持ってない。どこへ行っても、みんな儀礼的なんだよ。ネクタイなんかも用意していない³⁰。

この表現は、交流に関する日本人とカナダ人との認識のギャップを、極めて鮮明に現している。カナダ人に見れば、「友だち」の所へ遊びに来ているとの認識であり、普通はネクタイとかジャケットも持ち合わせていない人が多い。ところが、日本の公式の行事では、服装はもちろんのこと、関係分野の偉い人たち全員のスピーチを欠かすことはできないのが普通である。日本人にしても慣れていないとは言え、決して楽しい訳ではなく、多少の忍耐も必要なのである。形式ばらない文化を持つカナダ人にとっては、極めて厳しい経験となる。一人のカナダ人の苦情であり、公的なルートで表明された訳でもないのに、これだけでは日本の儀式文化は変わりはない。しかし、多少とも問題を解決しようとするには、まずは担当者および行政の長が「これが問題だ」ということを認識することが必要だと思われる³¹。

(5) カナダの子は自分勝手だ！

日本とカナダの子供たちが相互派遣をして交流をする場合、その背後にある文化的な違いや仕組みの違いまで考えることは少ない。従って、日本の子供たちにとっては、カナダの少年たちの行動が理解しがたいものに映ることもあるのである。担当職員の方は次のように語っている。

世田谷の子供たちは、向こうの子が怪我をしてはいけないとか、色々気をつけているんですね。ところが、それにもかかわらず、向こうの子供たちは日本に来るのは、念願というか、自分の力で来たんだというのがあるんですね。自分は、日本に行くのを希望して、自分できたんだ。例えばお金に関しても、お手伝いをして自分できたんだと。だから、言い方はちょっと悪いですけども、日本へ来て何をしようと私の自由によって言うところが、無きにしもあらずなんですよ。ただ、それが日本の子供たちにとっては、自分勝手だと

³⁰ 鹿追町役場でのインタビュー、前掲。

³¹ 儀式文化の日本からカナダに行くとは、逆の意味で驚かされることになる。カナダの公式行事に参加した日本の訪問団の人々は、「形式ばらない」、「緊張させない」、「日本人では考えられないリラックスさ」と感じている。レセプションで、日本人であれば挨拶から始め、「いつ礼を行ったら良いか」などが頭を占める。ところが、カナダ人は「そんなこと気にしないで食べなさい」と言った具合で、ワインなんかを飲んで、帰りがけに何か言いたかったらチョット言ってもいいなという感じで、全く度肝抜かれたと言った感じだったということである。上富良野町役場でのインタビュー、前掲。

ということになるんですね。ちょっと羽目を外しすぎだ一って、怒る子も居ました³²。

このように「自分勝手」だと考えるのは、日本的基準からすれば自然なことである。なぜなら、日本の子供たちがカナダへ行く場合は、費用の面でも公的補助を受けており、自治体の代表でもあり学校の代表でもあるのである。子供たちは自分たちがカナダに行く事ができたのは、「学校の先生、役場の担当職員、両親」のお陰であり、「行きたくても行けなかった友達もいる」のだと感じている³³。このような日本の子供たちの目からすれば、「個人としてではなく集団として行動すべきである」と考えたいのはよく理解できる。

ところが、カナダの少年たちにしてみれば、そのような考え方は到底理解できるものではない。費用も自分たちの力で捻出したものであるし、日本のように自治体の支援も受けてはいないので、自治体の代表だという意識はないのが普通である。また、日本の場合のように複数の公立中学校から選抜された訳でもなく、自分が行きたいから応募したのであり、学校の代表という意識も存在しない。まさに、自分が望んで、そのための費用を自力で作り、自分でやってきた、ということになるのである。

上の担当職員の方の言葉から、担当職員の方は日本とカナダの違いをよく理解されているのが分かる。しかし、日本側の少年たちは、カナダの少年に向かって「自分勝手だ」とは述べてはいない。従って、カナダの少年たちにとっては、相手がこんな風に自分たちのことを思っているとは知る術もないのである。

(6) 怒りを胸に秘めて——耐えきれずに爆発

双方の思い、あるいは一方の思いが通じることなく、相手のことを誤解したままで別れるのは、まだ良いのかも知れない。最悪の場合には、険悪な状況のもとで、相手に対して悪感情を抱いて別れることになるのである。しかも、お互いになぜそのような結末に至ったのかが分からないままなのである。次のケースは、そのような破局への経緯を示すものである。

彩子さんの家は温泉街で旅館を経営しています。彩子さん自身、高校生の時に姉妹都市を訪問しホームステイをした経験があります。現在は大学生で、姉妹都市からくる二人の男子高校生のホストファミリーになりました。高校生たちが来る時期は、旅館が忙しい夏でしたが、彩子さんは自分もお世話になったのだから恩返しにという気持ちでした。彩子さんは、日本文化を知ってもらうために、神社や仏閣などに二人の高校生を案内しました。しかし、高校生たちは日本の歴史や神社などには興味を示さず、二人が夢中になったのはゲームセンターやゲームソフトでした。また、最初から“Saiko is crazy!”と何度も言っ

³² 世田谷区役所でのインタビュー（第2回目）。

³³ 同上。

ていました。彩子さんは、一体どういう意味だろうと、辞書で調べると、psycho(サイコ)は気違いという意味だと分かりました。彩子さんは、自分の名前が「気違い」だと言われていたのを知って、すごく腹がたってきました。二人の高校生に対して止めてもらいたいと言いたかったのですが、面と向かっては言えませんでした。悶々とした末に、これまでの事情を英語で書いて市役所の姉妹都市担当者に手渡したのです。担当者も、いきなりの事だったので、ビックリしたのは言うまでもありません。しかし、何よりも驚いたのは、担当者から彩子さんの手紙を見せられた二人の高校生でした。二人は、まさか彩子さんが、そんな風に傷ついていたということは思ってもみませんでした。サイコさんが、なぜそのような行動をとったのかも分かりませんでした。しかし、二人はただただ“I'm very very sorry. I'm very sorry. I didn't mean to hurt you.”と繰り返すのが精一杯だったのです³⁴。

思っている事、とりわけ「嫌な事を嫌だ」というような否定的な内容の場合には、口に出して言うことは極めて難しい。日本人なら理解できることである。彩子さんにしてみれば、英語で手紙を書いて手渡すということを決心する前に、自分の感情を現すような「仕草」をしたのかも知れない。あるいは、何度も何度も“Saiko is crazy.”と言われていたので、「今更、言い出しにくい」ということであつたのかも知れない。いずれにせよ、彩子さんは自分の気持ちを言葉にして一度も伝えていないし、行動でも現すことはなかったのである。

英語の手紙を見て初めて彩子さんの気持ちを知ったカナダの若者たちは、謝る以外にはなかったのだが、多分、「なぜ、その時に言ってくれなかったの？」という事を心の中で思っていたに違いない。「彩子」という漢字の意味も分からないカナダの若者にとっては、「サイコ」という音が英語の“psycho”と同じだったので、単にジョークのつもりで言ったことであろう。その時に、彩子さんの方から何らかの意思表示があつたのなら、事態の悪化は防げたはずである。それが何度か続いた場合でも、その時点で「嫌だから、止めて」という意思表示が必要だったのである。それは、英語によらずとも、日本語でも良いしジェスチャーでも良い訳で、ともかく気持ちを形にするということが大事なことなのである。こうしていれば、おそらく最悪の事態は避けることができたと思われる。

このようなケースは、そうたびたび起こるものではない。しかし、カナダ人の高校生にしてみれば、彩子さんの行動は理解できるものではなかったし、彩子さんの方もカナダ人の高校生の行動が理解できずに別れたことであろう。そして、双方共に「なぜ、このような事になってしまったのか」が分からずに、お互いに不信感を抱いたまま別れることになったのである。

³⁴ 箱根町役場でのインタビュー。

III. 「相手の考えや行動が謎」のケース

それぞれが自分たちの文化の中では、長年の経験から「分かる」、「分からない」、「間違っている」などの判断はできるが、これが異なった文化の場合には「判断する基準」を持ってはいないので、「意味不明」といったことが起こりうる。これまで述べてきたような不快な思いや相手に対する誤解ではないものの、「意味不明」という「もどかしい」状況に陥ることになる。

1. カナダ人を受け入れて

(1) どうしてハネラレそうになるの？

カナダの姉妹都市からやってきた高校生が、日本の街の中で道路を渡るのに「命がけ」という状況を想像できるだろうか？ お互いの文化と行動様式の違いのために、時としてそのような事も起こるのである。ホストファミリーを引き受けた女子学生が、次のように事情を語ってくれた。

街の中をカナダ人の高校生と二人で歩いていて、何度も何度も目の前で起こった「理解不可能な出来事」、それは、カナダ人の高校生が、道を渡る時に「ほんとうに何度も何度も」車にハネラレそうになったという出来事です。別に障害があるわけでもなく、全く普通の健康な高校生なのです。従って、高校生にもなって、街の中で車に何度も何度もハネラレそうになるということは、それまで一度も見たことがないことだったし、全く考えられない事だったのです。ずーっと、どうしてなのかわかりませんでした。

この学生は非常に優秀な学生で、現在はカナダのレスブリッジ大学に交換留学生として1年間行っている。TOEICは900点以上で、英語による会話は何の問題もない。従って、「どうして何度も何度もはねられそうになるのか」と尋ねることはできたはずである。しかし、日本の常識ではとても考えられなかったことなので、そのような質問自体が浮かばなかったのであろう。

「一体、どうしてそんな事になったのか？」ずーっと「意味不明」のまま、頭の片隅あった謎が解けたのは、筆者が担当している「カナダ文化論」の講義の時のことであった。カナダにおける自動車とカナダ人の行動様式を取り上げ、「カナダでは車は威張っていない」との話をし、「ドライバーは横断歩道では歩行者のために必ず止まらなければならない」との説明をしたのである。それで、講義の後、教壇の所にやってきて、「先生、今日の授業で初めて謎が解けました。カナダでは必ず車は止まらないとならないので、そのつもりで渡ろうとしたから、ハネラレそうになったのですね！」と語るとともに、それまでの事情を説明してくれた次第である³⁵。

³⁵ 全くこれとは逆の事が、日本からカナダに行った場合に起こるようである。つまり、横断歩道のみ



トロントの街の中の様子。ドライバーはかなり遠くから、中央の上空の「X」マークが目に入る。横断歩道の道路脇に歩行者が立つと、車は止まらなければならない。右端の赤い“NO PASSING”から横断歩道の「X」の間は「追越し禁止」である。

(2) お土産の謎

- 毎日のお土産は、カナダの習慣？

日本人同士であれば、お土産を「何時、どのように手渡すのか」といったことについて問題

ならず歩道の脇に立っていると、車は止まってくれる。ところが、車が通り過ぎてからでないと道路を渡れないのが日本である。そんな日本から、「歩行者のために車が止まってくれる社会」にやっけてきても、「その意味が分からず」足が前に出ないのである。その模様を、ある人は次のように話してくれた。「まあ、一番驚いたのは、変な話ですけど、車が止まってくれるんですよ。渡ろうとすると。ええ、あれはもう日本の感覚で街を歩いていると、とにかく車が来ないのを見計らって渡らないといけないのだけれど…かえって、こっちが戸惑っちゃうぐらい、必ず止まってくれるんですよ。あれは、すごく驚きましたね。横断歩道だけじゃなくって、まあ、繁華街とかは、また別ですけども。中心通りって、一本しかないんですよ。後は、もう車がそんなに頻繁にいつも走っているような所じゃないんです。そういう所で、もう止まってくれるんですよ。…うーん、必ずしも続いている訳じゃないんで、スーと行ってくると、渡りやすいんですけど、こちらの感覚からすれば、やっぱり、歩行者を優先するというのは、もう常識とされているのですかねー？止まらなくても、最初は、うまく足が出なくて…、ウーン、別の用で止まっているのかなって思いますからねー。向こうでは、それが普通なんだろうなって。まあ、バンクーバーでは少なかったですけど。都会に行けば、まあ、違う面もあるんでしょうけれど…。(牛久役所でのインタビュー、前掲。)やはり、相手を理解するには、言葉だけではなくて「社会の仕組み、文化の違い」を知ることが重要であると言えるだろう。

になることはないであろう。ところが、姉妹都市からやってきたカナダ人がホストファミリーの人々にお土産を渡す際には、少々事情が異なる場合がある。その渡し方が、日本人のホストの側にとっては、意味不明なのである。その様子を、あるホストの方は次のように述べている。

向こうからお土産を持ってきてですね、それを毎日、小出しなんですよね。日本人だったら、最初の日とかに、みんなワーッと出してしまうと思うんですけど。例えば、前日に飾り物をくれたら、次の日にはTシャツくれたとか。毎日何か持って来て、少しずつ出して、くれるんですね。あれはどういうことなんですか？ アレはカナダの習慣ですか？³⁶

確かに、ちょっとした土産物を毎日くれるということは、日本人同士ではあり得ないことである。日本ではよそ様を訪れる時にお土産は欠かせない物であり、贈答文化の国でもあるが、よそ様のお宅に厄介になって毎日お土産を渡すなどということは聞いたことはない。日本的には、お世話になる最初の日にお土産を渡すのが一般的であり、人によれば最後の日にも渡すかも知れない。いずれにせよ、毎日ちょっとしたお土産を渡すということは、考えられないことである。

このように日本の習慣ではない以上、「毎日少しずつお土産を渡すのはカナダの習慣ですか？」と考えるのは当然のことであろう。しかし、カナダ社会では日本のように物のやり取りをすることはなく、毎日何かお土産を渡すということも聞いたことがない。従って、上の質問にたいする筆者の答えは次のようなものであった。

カナダ側では、日本ではお土産は非常に大事な習慣だと誰かから聞いて、日本人に失礼にならないようにしたものと思われまます。しかし日本のような習慣がないために、「いつ、どのようにして」手渡すのかまでは分からなかったのではないのでしょうか。お土産を渡すのに適切な時期があるとは分からなかったので、毎日少しずつ手渡すことになったのではないのでしょうか。

実際、後日、カナダのこの町を訪れる機会があり、関係した人に尋ねてみると、やはり「その通りです」という答えを得ることができた次第である³⁷。

・大量のお土産は、カナダの習慣？

お土産に関しては、日本側が理解できないと言うか、驚ろかされるようなケースも起こって

³⁶ 鹿追町役場でのインタビュー、前掲。

³⁷ Stony Plain でのインタビュー。カナダ側に日本人のアドバイザーが居れば、このような問題は起こらないようである。最初は、「なんでそんなにお土産が必要なんだ」という言い方をしていた町長さんも、一緒に買い物に行き、「これは教育長に、町長の奥さんに」と説明をしながら、「日本人気質のお土産」を選びをすると、納得するようである。上富良野インタビュー、前掲。

いる。それは、カナダの訪問団からあまりにも大量のお土産をもらったということである。

土産の件ではですね、一番最初からすごい量を持ってきたものですからね。スーツケースの半分くらいが、全部お土産だったようですね。家族が5人居ますとね5人分全部用意しているんです。それが一つじゃないんですよ。いくつもあるんですよ³⁸

以上のように、ともかくお土産好きの日本人もビックリするほどの量であり、日本人側とすれば「裕福な地域」であり「交流を続けたいという意思の現れ」と受け取っていたとのことであった。これら二つの理由は全くその通りだと思われる。しかし、それだけだと考えにくいのである。と言うのも、カナダでは日本のお土産文化は存在していないし、日本に来る時に現地の日本人からアドバイスされると、「どうしてそんなにお土産が要るのだ？」と言うのが普通の反応だからである。

従って、上のお土産の箇所でも触れたように、日本人に失礼にならないようにとの気持ちが強いと思われる。そして、日本社会におけるお土産の重要性を日本人か誰かに聞いたものの、具体的な事柄までは教えてもらわなかったという可能性が高い。日本的に「誰に、どのお土産をあげる」と考えたとしたら、「日本人も驚くほどの大量のお土産」にはならなかったはずである。従って日本人にとってお土産は重要だという知識はあったものの、それ以上具体的には考えなかったのだと推測するのが妥当であろう。もちろん推測の域を出ない訳であり、現地を訪れる機会があれば是非確かめてみたいと思っている。

(3) 受け入れ担当職員

実際に姉妹都市交流に関わる担当職員の方々にとって、カナダ人の行動が理解できない場合もかなりあるようである。

・公私混同がどうして許されるの？

日本の基準からすれば「あり得ない」と言う状況に出会い、ある担当職員の方は次のように述べている。

人によって、ほんとにバラバラなんですね。ホワイトホースだからか、カナダだからなのか分かりませんが…。人によって全然バラバラというのはですね、私が直接担当するよう

³⁸ 第三大島小学校でのインタビュー。カナダを訪れた際にも、次のように大量のお土産を貰ったとのことである。「私たちが行った時ですね、帰りに沢山のお土産をいただいたりとかしてますのでね。もう目一杯でも入らなくなっているにもかかわらず、こんなデカイもの、こんなデカイものを、これも、これも、持って行って感じてしたね。それは、家庭だけじゃなくて、学校サイド、PTA サイドでそういう事があってですね。うーん、すごい自然な感じで、今度これからもンドン交流を続けていきたいっていう意図があるんだろうなって、そういう風には思いましたけれども。」

になって、最初に来たのが18名ぐらい来たんですよ。その年は、なぜか多くて。それまでは、ほんとに3、4名ぐらいしか来てなかったんですけど。それで、その年に来たこの一人がですね、年齢層がなぜか下がってきて、13才か12才ぐらいの子供なんですよ。まあ、これは団長さんから後で聞いた話なんですけど…。

こちらから送る場合は、今までですと高校生ですね。ところが、向こうからは中学生が混じっているというようなことがあるんですよ。その辺やっぱり、アレですかねー、緩いんですよ。緩いと言えば、去年なんかはですね、団長さんが、小学生を一緒に連れてきてたんですよ。団長さんが、ご夫妻で子供を連れてなんですよ。牛久の市役所で、そんな申し込みされたら、ちょっと、それは無理です。ゴメンなさいって言いますけどね。それは止めてくださいって話になっちゃうんですけど³⁹。

日本の考え方からすると「あり得ないことだ」という思いが伝わってくる。相互派遣で、日本側が高校生を送っているのだから、当然カナダからも高校生が派遣されるべきだという考えである。その中で、中学生が混じっているということもあり、これも本来はおかしいことなのだが、何と団長夫妻が小学生を連れてくるに至っては、とても理解できなということになる。上にも述べられているように、日本でそんな事をすれば、当然のことながら申し込み段階で受け付けてもらえないし、そもそも申し込みをしようなどと考えはしない。従って、このような日本の考え方からすれば、カナダ人の行動は全く理解できないことになる。

ところが既に他の所で触れたように、カナダでは姉妹都市交流に関しても日本と同じように運営されている訳ではないのである。極端な言い方をすれば、姉妹都市交流の担い手は、日本では自治体であるのに対して、カナダでは民間であると言っても良いだろう。日本に来る場合も、自分が行きたいから申し込むのであり、費用についても自己負担であり、地域の代表、自治体の代表だという思いはないと言ってもよい。

以上のような担当職員の感じ方は、自治体のプロの見方としては至極当然のことである。そして、それは一般的な行政分野においては妥当なことである。しかし、姉妹都市交流という分野においては、相手のカナダ人は日本人のような考え方や行動様式とは異なっているのである。そして、カナダにおける行政の役割も異なっているのである。従って、実際にカナダ訪問団の随員となって何度かカナダに行き、自らがカナダと日本の違いを肌で感じ取ってくれば、ここで扱ってきたような疑問点は解消されるものだと思う。これら二つの例は、基本的に「集団」で行動するのか「個人」で行動するのかという根本的な点が関わっていると言えるだろう。

³⁹ 牛久市役所でのインタビュー、前掲。

2. カナダを訪れて

(1) まさかドアのせいだったとは！

自分たちとは異なる文化の中では、物事の見方や解釈が異なるために、何か不自然だという感じは抱いたとしても、それが一体なぜなのかが不明な場合もある。例えば、日本では家庭でも学校でもドアの役割について教わることはないし、学んだこともないのが普通である。近頃では、トイレのドアに関しては、使用後は開けておくようにとの説明を受けて出発することが多いようである。従って、ここではトイレのドアについては触れない。しかし、ドアの一般的な役割について知っておくことは大事である。ある女子学生がホームステイ先で経験して、ずっと頭の中に引っかかっていたことは次のようなことであったが、実はドアと関係しているのである。

家族みんなで夕食を終えて、私は独りで近くの公園に散歩に出かけました。1時間ほど散歩をして帰宅し、二階にある自分のベッドルームに直行し、ドアを閉めて明日の英語授業の予習をしていました。しばらくしてから、ホストマザーがドアをノックして、「何かあったの？」と尋ねたのです。なんでそんな事を聞くのだらうと思ったんだけど、その時以来、この事が頭の片隅に引っかかっていたんです。それが、今、講義を聞いていて、やっと分かりました。ホストマザーは、私のことを心配してくれたんですね。

これは、筆者が担当している異文化理解論の講義で、ドアの役割について説明をしていた時のことである。カナダやアメリカでは、寝る時と着替えをする時以外、ドアは開けておくようにと言われるのが普通である。ドアが閉まっているということは、「入ってきてもらいたくない」というサインであり、ホームステイ先ではドアを開けておく方が「入ってきて良い」という事なので、みんなと親しくなれるからという趣旨のものであった。従って、上記のような状況では、散歩から帰宅した時に、まずリビングの家族に声をかけてから二階で勉強をするという具合に、一言声をかければ良かったのである。つまり、帰るなり二階に上がり、ドアを閉め切ったということは、状況的に「散歩中にイタズラをされたか何かあったのではないか」ということで、それでホストマザーが「何かあったの？」という言葉をかけてくれたと理解されるのである。この学生にとっては、よほど気になっていたのか、「先生、ずっと引っかかっていた事が、やっと分かりました」と、謎が解けてすがすがしい顔になっていた。

(2) なぜ置いてきぼりに!?

この第18回の姉妹都市会議の基調講演で上のようにドアの件について触れたところ、会議の間に深川市の姉妹都市担当の方々から、次のような貴重なお話を聞かせていただくことができた⁴⁰。

⁴⁰ このエピソードは、小滝聡氏（拓殖大学北海道短期大学副学長）と上垣由紀子氏（深川国際交流協



このように二階の部屋のドアがピッタリと閉まっていたとしたら…

深川市からアボツフォードに中学生の研修団を送っているが、そのうちの一人が経験したことについてです。ある日のこと、「今日は家族みんなであの所に行ってみよう」と楽しみながら準備をしていた時である。深川市からの中学生も楽しみにしながら、二階の自分の部屋に上がってドアを閉めて待っていたそうである。ところが、気がついてみると、みんな車で出かけてしまって、自分一人が置いていかれたとのことで。どうしてそんな事をされたのか、すごくショックだったとのことでした。

以上が、筆者のドアについての話を聞いた深川市の担当の方が、「どうも、ドアを閉めて部屋に閉じこもっている」と解釈されたと考えれば納得がいくとのことで、わざわざ聞かせてくれたエピソードである。

この中学生にしてみれば、日本のように下から「行くわよー！」と声をかけてくれるものと思っていたのであろう。しかし、みんなで出かける準備をしている状況の下で、二階の部屋で一人ドアを閉め切った状態で待っているというのは、カナダでは普通はちょっと考えにくいだろう。他の家族は車の中で待っていて、誰かが家の中に入って声をかけたかも知れない。あ

会理事) の両氏から教えていただいた。

るいは階段の下まで来て、二階を見ると部屋のドアがビシッと閉まっていたのが目に入ったのかも知れない。多分、部屋のドアが開いた状態であったとしたら、その日は楽しい一日になっていたはずである。

おわりに

本論では日本とカナダとの姉妹都市交流を異文化接触の視点からみてきた。その中から重要なくつかの点を指摘して締めくくりとしよう。

カナダ的行動様式は、日本的基準からすれば想像しがたいものであるが、良い意味でも悪い意味でも極めてダイレクトであり、日本人にとっては相手の意図が非常に分かりやすいものである。歓迎の言葉を書いた大きな紙を空港で掲げて迎えたり、日本からの生徒たちを理解しようと、面と向かって真剣な態度で接してくれる。そして、嫌いな食べ物には手を付けず、おにぎりの海苔は外して食べるなど、自分の気持ちを明確に表現している。このような行動に対して、日本人側が「対応」というパターンが傾向として見られる。慣れないうちは感情的に戸惑う部分もあるが、相手の意図は明確であり相互理解への第一歩だと言える。

日本人的行動様式は、カナダ人の行動様式とは対照的に、「思っけても口に出さない」というものである。日本では「雰囲気」が判断基準の大きな要素であり、日本人同士であれば分かり合えるが、カナダ人にとっては理解を越えたものである。お風呂に入るのやタバコを我慢したり、掃除を我慢したりするように、日本人側は思っけても「言葉にするのを躊躇い」がちである。意図はメッセージとはならず、伝わってはいない。このような日本的行動様式は、カナダ人にとっては極めて分かりにくいものである。そして、最悪の場合には、堪忍袋の緒が切れるまで辛抱して、遂には耐えきれずに爆発してしまうというケースもある。日本人にとっては分からないでもないが、相手のカナダ人にしてみれば、「なぜ相手が急に怒り出すのか」が全く理解できないケースである。しかし、少ないながらも、日本人の方から「働きかけ」ていくケースも見られている。カナダ人の家庭でシャワーを直したり、「目的はカナディアン・ハウスだ」と反論したようなケースに見られる行動は、カナダ人にとっては極めて理解しやすいものである。相互理解に至る一つのモデルと考えても良いだろう。

お互いに自分たちとは異なる異文化に接して、相互に影響を受けあっているという事実も存在している。例えば、日本の自治体の担当職員は、当然のことながら「日本の自治体の仕事のやり方」に従って仕事をするようになる。その結果、「分刻みのスケジュール」ができあがるが、カナダ人の校長が乗り込んできて苦情を言われることにより、「子供同士の交流」が大事だという認識に至っている。ここにも、カナダ側の行動にたいする対応という形が見られるが、カナダ側の方にも日本のやり方を取り入れようとしている点も見られた。町長が「日本に習ってタイトな日程に」と指示をしたケースだが、カナダのスケジュールは普通は「アバウト」なものであるので、この場合には町長がかなり親日的だというような要因があったためかも知れない。

いずれにせよ、お互いが出会うことがなかったとしたら、このような変化は生まれることはなかったのである。

いくつかのケースからも明らかなように、日本人もカナダ人もそれぞれ「自分たちの文化」あるいは自分たちの基準で相手の行動を理解しようとしているのが分かる。ところが、自分たちの行動は自分たちの文化基準で理解はできるが、相手の行動は「相手の文化」を知らなければ理解は困難なのである。例えば、カナダ人が日本の姉妹都市を訪問する時は「友だちのところへ遊びに行く」と考えてカジュアルな装いで来てしまうと、歓迎の儀式の場では具合の悪い思いをすることになるのである。また、日本の自治体の派遣事業を「常識」としてカナダの訪問団のことを考えると、「公私混同している」とか、「カナダの生徒はわがまま」だという結論になってしまうのである。

さらに、お互いに自分たちの文化には存在していない事を想像するのは難しいことであるということも明らかになった。カナダ人たちは、お土産のケースに見られるように、日本の文化や習慣を尊重して日本人に対して失礼にならないようにと配慮しているのが分かる。しかし、お土産の量や渡し方についての知識までは得ていないようで、日本人にとっては不思議な渡し方であったり、驚くほど沢山の量のお土産となっているのである。また、カナダ国内のように歩道を渡ろうとしても、日本では車は止まってくれはしない。そしてカナダの事情が分からなければ、なぜ車に敷かれそうになるのかが謎のままなのである。カナダの住宅におけるドアと個室の関係に関しても、そのようなカナダ文化を知らなければ、本論で扱ったドアのケースのように、たとえ自分自身が体験したことであっても永遠に謎のままになってしまうのである。

以上述べてきたように、それぞれが「自分の基準」で相手を解釈することにより相手の意図が分からなかったり誤解が生じるのであるが、その事にお互いが気付いていないのである。「お互いの基準」が異なっているという認識が必要であり、お互いに相手の基準を知ることが必要となる。そして、お互いに、相手方の思考様式・行動様式を事前に学ぶ機会が必要だと思われる。もちろん、頭で分かっても、実際に経験した時の感覚とは異なるものではあるが、少なくとも「誤解」する確率が少なくなり、「謎」の部分も解けてくるであろう。要するに、お互いに相手の文化と「相手の基準」を知り、自分たち自身の文化を越える努力が必要であり、そこから相手に対する理解が可能になるのである。

聞き取り調査資料

- ・網走市役所，1987年11月20日。
- ・池田町役場，1987年12月7日。
- ・板橋区役所政策経営部国際交流課，2002年11月10日。
- ・牛久市役所，2003年11月5日。
- ・尾鷲市役所，2008年9月24日。
- ・上富良野町役場，1987年12月15日。
- ・江東区立第三大島小学校，2002年12月10日。

- ・世田谷区役所，2002年9月24日（第1回），2004年6月21日（第2回）。
- ・鹿追町役場，1987年12月2日。
- ・白老町役場，1988年4月22日。
- ・名寄市役所，1987年12月2日。
- ・箱根町役場，2003年3月4日。
- ・横浜市国際交流協会，2002年12月2日。
- ・陸別町役場，1987年11月27日。
- ・Stony Plain (Alberta)，1994年9月1日。

参考資料

- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係——何を学ぶか——」，『めいぶる』北海道カナダ協会会報第71号・創立25周年記念号，北海道カナダ協会，2004年。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——板橋区とパーリントン市のケースについて——」，『人文論集』（第37号），北海学園大学，2007年。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——牛久市とホワイトホース市のケースについて——」，『人文論集』（第31号），北海学園大学，2005年。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——江東区とサレー市のケースについて——」，『人文論集』（第26・27合併号），北海学園大学，2004年。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の分析——世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係——」，『人文論集』（第34号），北海学園大学，2006年。
- ・井上真蔵「国際化の一側面——北海道とカナダとの姉妹都市関係について——」，『北見大学論集』北海学園北見大学，1993年。
- ・牛久市姉妹都市委員会『1998年度牛久市交換青少年事業報告書』牛久市姉妹都市委員会，1998年。
- ・牛久市姉妹都市委員会『2001年度牛久市交換青少年事業報告書』牛久市姉妹都市委員会，2001年。
- ・鹿追町『第2回鹿追町北方圏視察研修報告書』1984年。
- ・鹿追町『第3回鹿追町北方圏視察研修報告書』1986年。
- ・世田谷区役所生活文化部文化・国際課『第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書』2004年。
- ・北海道カナダ協会『第15回北海道・カナダ姉妹都市会議録』，2006年。
- ・北海道カナダ協会『第16回北海道・カナダ姉妹都市会議録』，2007年。
- ・北海道カナダ協会『第18回北海道・カナダ姉妹都市会議』，2009年。
- ・陸別町役場『絆8000キロを越えて——昭和61年度町民海外研修報告書，陸別町・ラコーム町姉妹都市提携の概要』陸別町役場，1986年。

インターネットによる資料とサイト

- ・カナダ大使館ホームページ
「カナダ・日本 姉妹・友好都市リスト」
<http://www.international.gc.ca/missions/japan-japon/bilateral-relationships-bilaterales/sistercity-jumelage-jpn.asp>
- ・自治体国際化協会のホームページ。
「姉妹提携情報」
<http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/02.cgi>

- 北海道カナダ協会のホームページ。
「姉妹提携一覧」
<http://www.lilac.co.jp/maple/sister.htm>